

庭の手入れをするような

手嶋 英貴

とある教育関係者の集まりで、私と同じように大学で文章表現を教えているという M さんに出会った。いわば同業者みたいなものだが、M さんは私以上に「遊び」の要素を授業の中に取り入れているらしく、話を聴いていてとても興味深かった。その中で、特に印象に残った遊びの例が「雑誌でワンフレーズ」というものだ。まず、学生にいらなくなった雑誌を一人一冊ずつ教室へ持ってきてもらう。そして、その雑誌の誌面から自由に単語やフレーズを切り抜いて、自分なりの感性が宿った「ワンフレーズ」を創ってもらう、という遊びであるらしい。

自由に言葉を書きつづるのとは違い、雑誌に載っている言葉しか使えないから、かなり不自由な文章づくりだ。しかし M さんによると、その制限された状態から自分の感性に合う言葉を探していくと、自由な創作活動では決して思いつかない新鮮な言葉や表現が飛び出し、なかなか面白い作品が生まれるというのである。

それを聞いて、研究熱心な私は——というのは冗談で、本当は帰りの新幹線の中で余りにヒマだったからその気になっただけだが——教わったばかりのその遊びを試してみた。素材は週刊誌『AERA』である。いつも持ち歩いているハサミを取り出して、『AERA』のあちこちを切り取りはじめた。やってみると、これはけっこう悩む作業である。面白そうな「言葉の断片」はいくらでも見つかるのだが、それを意味のある「文」に仕立てるのが難しい。そうして、悪戦苦闘するうちに、やっと一個の文章らしきものが出来上がったのである。それは、

「庭の手入れをするような、鮮やかな引退と転身。」

というものだった。

もとは「庭の手入れ」と「をするような」と「鮮やかな引退と転身」というバラバラの断片だったのを、無理やりにくっつけたのである。自分で作っておきながら、えらくごちない文章だと思った。そもそも「庭の手入れ」がなぜ「引退と転身」に結びつくのか、よくわからない。この二つの言葉の間に、たまたま見つけた「をするような」を思いつきで入れてただけなのだから、当然といえば当然である。ところが、しばらくこのフレーズを眺めているうちに、私は何だかそれが、自分にとって非常に意味深いものであるような気がしてきた。

「庭の手入れをするような、鮮やかな引退と転身。」……こりゃあ、なかなかいいぞ。そういう生き方ができたらいいな、と自分がいつも漠然と思っていたことが、鮮やかに表現されているではないか。と、そう思ってきたのである。

庭の手入れというのは、季節の移り変わりとともに、庭の風景を変えていくことである。

庭いじりの好きな人なら分かると思うが、人間が作った庭というのは、盛りを過ぎた草花を定期的に除かないと、すぐに荒廃してしまう。もちろん、種や球根から芽吹かせてようやく咲かせた草を、時期が過ぎたからといって抜くのは惜しい。しかし一方には、次の季節に咲く別の草花がある。それらが精一杯の花盛りを迎えられるためには、地養が充分行きわたるよう、時季の終わった草を間引かなければならない。よく咲いてくれた草たちに愛着を感じながらも、それを間引いていく。庭の手入れには、そうした一種の諦めというか、いさぎよさみたいなものが必要なのである。

そのように考えてみると、庭の手入れはいくぶん人生に通じるものがあると思うのだ。

私自身も含めてだが、誰しも自分の人生という「庭」を持っている。そこに生えた草木——つまりは経験や実績、社会的立場など——には、もちろん愛着がある。自分が頑張って植えたものもあれば、偶然に外からやってきた種が芽吹いたものもあるだろう。どれもが自分の大切な一部だと感じられ、出来る限り長く守ろうとする。それはまったく自然な反応だし、人間が生きていくためには必要な感情でもあるだろう。しかし、それを守ることに執着しすぎて、新たな庭の風景——つまりは新たな自分像——を思い描けなくなると、私たちは成長する力を失ってしまう。愛着を感じながらも、今までの自分から脱皮して変化を受け入れていく。そんないさぎよさを持ち続けたいという思いが、以前からぼんやりと私の中にあっただのである。「庭の手入れをするような、鮮やかな引退と転身。」というのは、そうした漠然とした自分の感情を鮮やかに浮かび上がらせるフレーズであった。まさしく、Mさんが「自分だけでは決して思いつけない表現が生まれる」と言っていたとおりのことが、私には起こってしまったのだ。

こんなことがあってから、私は以前よりはっきり、こう思うようになった。仕事でも、趣味でも、子育てでも、草花を育てるように、それがよく咲き、実るように頑張ろう。精一杯頑張った後で、次の季節を迎える時が来たら——例えば仕事に転機がおとずれたり、子供がひとり立ちする時が来たら——その時は過去に満足しながら、次の人生のあり方を思い浮かべよう、と。しかし、もし自分が過去に悔いを残したり、未来に希望を感じられなければ、とてもそうは思えないだろう。自分なりに努力し、しかもそれなりの成果が得られたと感じてこそ、いさぎよく次を考えられるのではないか。つまりこれは、自分を不幸だと思っている人には、決して持つことの出来ない考えなのである。

“幸せ”といっても、何かの目標を達成したり、状態を維持したりすることばかりではない気がする。むしろ私にとっては、庭の手入れをするように、いつも前向きに自分を変化させられることが、幸せの証であるように思えるのである。